GÉRARD KORSTEN(Violin)
SONOKO MAEJIMA(Piano)
BEETHOVEN
SONATAS FOR VIOLIN AND PIANO
Sonata No.5 in F Major, Op.24 "Spring"
Sonata No.9 in A Major, Op.47 "Kreutzer"
DAMPC

モーツァルテウム・グロッサー・ザール（外観）

ベートーヴェン
BEETHOVEN
(1770-1827)

ヴァイオリンとピアノのためのソナタ
SONATAS FOR VIOLIN AND PIANO

ジェラール・コルステン
GÉRARD KORSTEN(Violin)
前島園子
SONOKO MAEJIMA(Piano)

ソナタ 第9番 イ長調, Op.47「クロイツェル」
Sonata No.9 in A Major, Op.47 "Kreutzer"

1	第1楽章：アダージョ・ソステヌート－プレスト	1st Mov.:Adagio sostenuto-Presto	13:44
2	第2楽章：アンダンテ・コン・ヴァリアツィオーニ	2nd Mov.:Andante con Variazioni	14:48
3	第3楽章：プレスト	3rd Mov.:Presto	8:23

ソナタ 第5番 ヘ長調, Op.24「春」
Sonata No.5 in F Major, Op.24 "Spring"

4	第1楽章：アレグロ	1st Mov.:Allegro	9:19
5	第2楽章：アダージョ・モルト・エスプレッシーヴォ	2nd Mov.:Adagio molto espressivo	6:08
6	第3楽章：スケルツォ(アレグロ・モルト)	3rd Mov.:Scherzo(Allegro molto)	1:12
7	第4楽章：ロンド(アレグロ・マ・ノン・トロッポ)	4th Mov.:Rondo(Allegro ma non troppo)	6:24

制作にあたって

日頃は第一家庭電器をご愛顧いただき、誠にありがとうございます。

今回は、'88年6月の「サヴァリッシュ◉マドンナの宝石」以来、2度目の海外録音(DAM・ファンハウス共同制作)であり、又'88年11月の世界最後となってしまったダイレクト・カッティングによる「西島三重子◉地球よ廻れ」から2年振りのDAMオリジナル録音アルバムです。

ジェラール・コルステン氏と前島園子さんのデュオによる、ベートヴェンの「クロイツェル、スプリング」の録音は、DAMの過去のオリジナル録音がきっかけとなって実現いたしました。といいますのも'86年11月に「徳永二男◉チゴイネルワイゼン」というDAMオリジナル録音盤を発表しましたが、その時のピアノ伴奏が今回と同じ前島園子さんでした。その後、DAM・東芝EMI共同制作による、「サヴァリッシュ◉マドンナの宝石」のミュンヘン録音の時に、見学のため、特別参加されたのが、本アルバムの録音を担当した蜂屋ミキサーであり、その折、東芝EMIのレコーディング・スタッフから、ザルツブルク在住の前島園子さんを紹介され、今回のレコーディングに発展したというわけです。

ところで蜂屋ミキサーと、DAMのかかわりは、今回が初めてではなく、実は以前、蜂屋氏は東芝EMIでオフコースや寺尾聡の録音を担当されていたのですが、'77年DAMにとって初めてのオリジナル録音となった「ライヴ!ニューハード　76／45」のトラックダウンを手がけていただいているのです。

DAMは本来、いわゆるポピュラーな名曲を中心に選曲を行っていますので、本格的な室内楽曲は避けてきましたが、一年半程前に、先のようなご縁から、この録音のお話しがあり、将来を嘱望される若手アーティストによる、ベートヴェンのヴァイオリン・ソナタ全曲録音という、大変有意義な企画に参加させていただくこととなった次第です。

ベートヴェンのヴァイオリン・ソナタ全集といえば、古今の名だたるヴァイオリンの大家――クライスラー、シゲティ、シェリング、グリュミォー、スターン、ヴェーグ、パールマン――の名盤がひしめいていますが、何故か最新録音がありません。

そこで若冠29才のジェラール・コルステンと前島園子という清新なデュオを起用し、それもザルツブルクまで出かけて全曲録音を敢行した、㈱ファンハウスの村山プロデューサーと蜂谷ミキサーのこのレコーディングは、フレッシュなアーティストとスタッフによる快挙といえるのではないかと思います。

その全10曲のソナタから、最も有名な「クロイッェル」と「スプリング」のゴールデン、カップリングを、DAMだけが独占して、CDとアナログLPで発表させていただきました。（国内でのアナログ・ディスクの製造が終了してしまった現在、大変希少価値の高いDAMアナログ・ディスクは、最新アナログ録音マスター・テープを使用し、オランダ・フィリップス社のカッティング、プレスによる2枚組アルバム・DOR0173-4として制作しています。）

なお10月25日に、ファンハウスの市販CD（FHCE-1006～9）として全10曲が全集として一括発売されますので、あわせてそちらもお聴きいただければ幸いです。

又、この11月14、15、17日の3日間、コルステン氏と前島さんが来日して、ベートーヴェン・ヴァイオリン・ソナタ発売記念連続演奏会が千駄谷の津田ホールで行われます。〔問い合せ　㈱ファンハウス☎03(350)8625〕

更には、来年3月、コルステン氏がコンサートマスターをつとめているヨーロッパ室内管弦楽団が、名指揮者クラウディオ・アバド氏と共に来日する予定になっており、今後コルステン氏の日本での評価と人気が一気に高まって行くものと思われます。

なお、本アルバム制作にあたり、㈱ファンハウス、並びに関係各位に多大なご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

1990年11月　DAM推進委員会

このアルバムについて

株式会社ファンハウス　制作プロデューサー **村山宣久**

今回のこのアルバムは、1990年２月と６月にオーストリア、ザルツブルクにあるモーツァルテウム音楽院大ホールで収録された、ジュラール・コルステン（ヴァイオリン）と前島園子（ピアノ）によるベートーヴェン：ヴァイオリンとピアノのためのソナタ全曲録音から第一家庭電器㈱のＤＡＭシリーズのためにスペシャル・カップリングされたものです。

ジェラール・コルステンと前島園子という二人のアーティストと初めて出会ったのは、一昨年の３月、金沢でのリサイタルででした。もともとは、エンジニアの蜂屋氏がミュンヘンでのサヴァリッシュのレコーディングを見学に行って、そこで前島氏と知りあったところから始まっています。蜂屋氏は前島氏から「とても良いヴァイオリニストがいる」事を聞き、それが今売り出し中のヨーロッパ室内

管のコンサート・マスターでもある事を知ったのでした。我々は二人が日本でリサイタルを開く事に非常に興味を持ち、金沢にはせ参じたのでした。

当日は雨で、ホールの中も湿度が高く、弦楽器奏者にとっては最悪のコンディションでしたが、そんな事をものともしない素晴らしい音楽がそこにあったのです。特に印象的だったのは、やはりベートーヴェンでした。

ジェラール・コンステンの音楽は、表面的な部分よりも内的感情表現を大切にしており特にエモーショナルな表現に天才的なものを持っています。また、そのマッシヴな音楽の作り方はその若さから想像できない深い精神性をもあわせ持っているのです。たとえば、その息づかい一つとってもそれが音楽を表現するための手段である事が、この録音を通してもおわかりになると思います。そして彼の音楽性がベートーヴェンを演奏するのに最も適しているのを確信して、このベートーヴェンの録音を計画するに至ったのです。

一方の前島園子のピアノですが、彼女の演奏を実際に聴くまでは、彼女の経歴や現在の立場（モーツァルテウム音楽院講師）が先入観としてあったためか、もっとアカデミックなものを想像していました。しかしながら、その実演にふれて、それがまちがいである事に気づいたのでした。その演奏は、もちろん基礎がしっかりしているのは当然ですが、日本人ピアニストの多くに感じられる「底の浅さ」が無い事、そして音に何か伝統のにおいのようなものを感じる事ができたのを覚えています。それが彼女の深い打鍵からきているのか、また長いヨーロッパ生活で、歴史を体で感じとって、それが音楽に反映されているのかは良くわかりませんが、日本人離れした感性は、内田光子さんの演奏に共通のインターナショナルなものに思えました。

その金沢の演奏会のあった夜からこのプロジェクトは開始され、やっと今、レコードという具体的な姿をここに現したのです。

ベートーヴェンは10曲のヴァイオリンとピアノのためのソナタを作曲しています。通常は「ヴァイオリン・ソナタ」と呼ぶ事が多いのですが、本来は「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ」だったのです。当時（特にモーツァルトの時代）はピアノが主役であり、中でもモーツァルトの場合はヴァイオリン・オブリガート付きのピアノ・ソナタというのが正式な位置づけでした。ベートーヴェンも初期のソナタの場合そういった傾向にありましたが、次第に２つの楽器が対等の立場で書かれるようになったのです。

現在ほとんどの録音がヴァイオリンを主役にして収録されており、ピアノは伴奏に甘んじている例が多い事は否めません。今回の録音においては、特にアーティストの意見を尊重して、あえて「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」と銘打っているように二人のアーティストの「デュオ」である事を主眼に置いて制作致しました。ヴァイオリンとピアノが対等にある事はもちろんですが、ある時はヴァイオリンが主役になり、またある時はピアノがヴィルトゥオジテを発揮して熱演しております。　この「デュオ」のコンセプトを実際の「音」にするために、録音時のバランスに特に留意しております。本来は絶対的な音量は左倒的にピアノの方が大きいのですが、今回の場合ピアノの音色を損ねる事無く、しかもヴァイオリンが埋もれる事の無い絶妙のバランスを実現していると思います。

ベートーヴェンの「ソナタ」の場合、現在のカタログを見回すと、ほとんど「巨匠」クラスの人ばかりになっていますが今回ヴァイオリンを弾くジェラール・コルステンは未だ29歳という若さです。とかく日本では「ベートーヴェンを弾くには若すぎる」とか「やはり音楽が浅い」とか言われがちですが、彼の深い音楽性とキャリアは決してベートーヴェンを弾く事に対して不足はありません。おそらく20代のヴァイオリニストによる全曲録音は世界初の出来事になりますが、若い感性をもってしか表現できない彼ならではの「ベートーヴェン像」を我々に明らかにしてくれるでしょう。また、モーツァルテウム音楽院にあいて多くの外国の学生達に対し教鞭をとってきた前島園子のピアノも、日本人に多くありがちな、単に西洋音楽の模倣に終わる事なく自分の主張を貫き通し、見事な「デュオ」に仕上げています。これもクラシックの本場であるヨーロッパを本拠地に活躍している彼女の自信の現れでしょう。最後にコルステンが「ホールのストラディヴァリ」と呼んだモーツァルテウム音楽院大ホールの素晴らしい響きも二人の演奏に彩りを添えて、録音を成功に導いてくれた事を記しておきたいと思います。実は、この録音の音決めをするのにせいぜい半日と思っていたのですが、現実にはほぼ一日かかってしまいました。その際我々にアドヴァイスをしてくれたO・R・F（オーストリア放送）のピヒラー氏に改めて感謝したいと思います。

今回のアルバムでは全10曲の中から最も有名な2曲を選んでお届け致しますが、皆様に二人のアーティストのベートーヴェンに対する熱い思いを感じとっていただければプロデューサー冥利につきると言っても過言ではありません。

モーツァルテウム・グロッサー・ザール(大ホール)

Gerard Korsten
ジェラール・コルステン(ヴァイオリン)

1960年南アフリカのプレトリアに生まれたオーストリアのヴァイオリニスト。17歳でアメリカに留学、クリーヴランド、カーチス両音楽院でイワン・ガラミアンに師事。'81年、サソル・ヴァイオリンコンクールに第1位。同年、南アフリカ放送指揮者コンクール優勝。シャーンドル・ヴェーグの招きにより、ザルツブルクに移り、モーツァルテウム音楽院で教える傍ら'83年よりカメラータ・アカデミカのコンサート・マスターとして活躍。その後、クラウディオ・アバドが音楽監督のヨーロッパ室内管弦楽団のコンサート・マスターに就任。
'89年2月にはギドン・クレメルをソリストに迎え、同管弦楽団とシュニトケ、ベリオなどの現代曲を指揮し、好評を博した。'88年にはモーツァルトのオペラ"フィガロの結婚"、"魔笛"、R.シュトラウスのオペラ『ナクソス島のアリアドネ』の指揮もしている。ソリスト、指揮者として、又新しい時代を担うパーソナリティとしてヨーロッパ各地で絶賛されている。

前島園子(Piano)
Sonoko Maejima

4歳よりピアノを始め岡林千枝子氏、井口愛子氏に師事、桐朋学園大学を首席卒業。その後、モーツァルテウム音楽院にてクルト・ノイミュラー氏に師事し、同院を首席卒業。モーツァルテウム音楽財団より、リリー・レイマン・メダルを授与された。またミラノにてアルベルト・モツァティ教授に学び、ジュネーブ国際音楽コンクールおよびエットレ・ポッツォリ国際ピアノコンクールに入賞。1975年よりモーツァルテウム音楽院にて教鞭をとる。在学中より桐朋学園オーケストラ、東京交響楽団と共演、皇居にて御前演奏、現在はオーストリアを中心に西ドイツ、イタリア、スペインにてリサイタル、室内楽、オーケストラとの共演等多彩な活動をしている。日本では1986年、ウィーンフィル木管奏者たち、コンサート・マスターのライナー・キュッヒル、1987年、88年にはジェラール・コルステンと各地で演奏している。

解説

宇野功芳

このレコードは、1990年2月と6月にザルツブルク・モーツァルテウム音楽院の大ホールで収録されたものである。

初登場のジェラール・コルステンは1960年南アフリカのプレトニアに生まれたオーストラリアのヴァイオリニストであり、17歳でアメリカに留学、クリーヴランドとカーチス両音楽院でイワン・ガラミアンに師事、1981年サソル・ヴァイオリン・コンクールで第一位を獲得、同年南アフリカ放送・指揮者コンクールでも優勝した。

シャーンドル・ヴェーグの招きでザルツブルクに移り、モーツァルテウム音楽院で教える一方、83年からカメラータ・アカデミカのコンサート・マスター、さらにヨーロッパ室内管弦楽団のコンサート・マスターに就任した。前述のように指揮者コンクールの優勝者でもあるコルステンは、現代音楽やモーツァルトのオペラを振るなど、幅広い活躍をつづけている。

一方の前島園子は四歳からピアノを始め、岡林千枝子、井口愛子に師事、第11回全日本学生音楽コンクール小学校の部で全国第一位に入賞した。1969年、桐朋学園大学音楽科を首席で卒業、翌年オーストリア政府の奨学金を得てザルツブルク・モーツァルテウム音楽院に留学、クルト・ノイミュラーに師事した。

1973年、同院を首席で卒業、ジュネーヴ国際音楽コンクール入賞、1975年からはモーツァルテウム音楽院で後進を教える一方、ソリスト、室内楽奏者としても活躍している。ジェラール・コルステンとのデュオはとくに好評であり、すでに日本各地でも公演、1990年秋には再度の公演が予定されている。

この「クロイツェル」と「春」は、ベートーヴェンのヴァイオリンとピアノのためのソナタ全曲録音の中からカップリングされたものであるが、両者ともに格調の高い上品さのなかに、優れたセンスと音楽性を漂わせた演奏だ。流れが良く、香りに満ち、歪みなく作品の美しさを伝えようとしている。「クロイツェル」の第1楽章展開部など、もう一つドラマがあっても良いと思うし、「春」でも強音部の主張にやや欠けるが、そのぶん弱音部のデリカシーは美しさのかぎりであり、両曲とも緩徐楽章が出色の出来ばえといえよう。

ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第9番イ長調作品47「クロイツェル」

ベートーヴェンはヴァイオリンとピアノのためのソナタを計10曲書いたが、それらのうち9曲までが「エロイカ」以前、つまり初期の作品であり、生涯を通じて作曲をつづけた交響曲、ピアノ・ソナタ、弦楽四重奏曲などに比して重要度はうすい。しかし、この「クロイツェル」は優れた出来ばえを示し、しばし演奏される。

作曲年代は1803年だが、ベートーヴェンはこれ以後、ヴァイオリンとピアノのためのソナタの分野から遠ざかってしまい、やっと1812年になって、必要に迫られた結果、「第10番」を完成するにとどまった。それというのも、「クロイツェル」において、二つの楽器の演奏効果を極限まで極めつくしたベートーヴェンは、もはやこの組合わせに興味を持ち得なかったのであろう。

「クロイツェル」と呼ばれるこの曲は、ひとりベートーヴェンのみならず、古今のあらゆるヴァイオリン・ソナタの最高傑作のひとつとして広く有名になっているが、名称については次のような逸話がある。

当時イギリスのヴァイオリニストにブリッジタワーという人が居た。ベートーヴェンはウィーンに演奏旅行にやって来た彼と会い、彼に捧げるソナタを1803年5月に完成したのである。

初演は同月25日にブリッジタワーのヴァイオリン、ベートーヴェン自身のピアノで行なわれ、大成功を収めた。楽譜は1805年にボンのジムロック社から出版されたが、作品を献呈されたのはブリッジタワーではなく、ヴェルサイユ生まれのヴァイオリニスト、クロイツェルであった。

その理由はベートーヴェンとブリッジタワーが不仲になったからである。ベートーヴェンはブリッジタワーの気どった態度にだんだんと反感を持つようになり、人間的に魅力を感じていたクロイツェルのほうに捧げてしまったのだが、クロイツェルはこの作品を「不可解千万なもの」として、ついに一度も演奏しなかったそうだ。

ベートーヴェンは同ソナタの出版に際し、「ほとんど協奏曲のようなスタイルで書いた」と付言しているが、たしかに通常のヴァイオリン・ソナタとは著しく異なり凄まじくも華麗な演奏効果を誇っている。外面的な迫力において、これに匹敵する曲は他に決してあるまい。しかもこの作品は文豪トルストイが同名の小説のなかに、夫が妻を殺害する動機として使用したため、いっそう有名になったの

である。

第1楽章　アダージョ・ソステヌート～プレスト　イ長調～イ短調　四分の三拍子～二分の二拍子。序奏つきのソナタ形式。

ヴァイオリンが無伴奏でモノローグのように弾き始め、ピアノがこれを反復する。序奏部は両者の独白が交互につづくが、ここだけですでに不気味な雰囲気がただよう。

主部はイ短調に変わり、早口でしゃべるようなせわしない第1主題がヴァイオリンに現れ、やがて二つの楽器は情熱的にからみ合いつつ高潮、火花の散るような迫力を見せる。

第2主題は対照的にゆるやかで人なつっこいホ長調だが、ふたたび激しさを取りもどした音楽はピアノが新しいテーマを弾き出す部分でクライマックスを迎える。このホ短調のテーマの巨大さはベートーヴェンでなくては書き得ぬものといえよう。以下、両者がシンフォニックにからみ合う熱っぽい展開部、そして再現部へとつづいてゆく。

第2楽章　アンダンテ・コン・ヴァリアツィオーニ　ヘ長調　四分の二拍子。変奏曲形式。

主題と四つの変奏から成っているが、安らかな主題は意外に人間くさく、変奏曲はいつ果てるともなく連続する。結尾部はヴァイオリン、ピアノ両者の心の動揺のようだ。

第3楽章　プレスト　イ長調　八分の六拍子。ソナタ形式。

これは元来、「第6番」のソナタのフィナーレとして1802年に書かれたものだが、調和を破るとの理由で「クロイツェル」に転用された。気ぜわしい終曲で、演奏効果は抜群である。

ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第5番ヘ長調作品24「春」

「スプリング・ソナタ」として名高いこの曲は1801年、ベートーヴェンの31歳の作と推定されている。「春」というタイトルは作曲者がつけたものではないが、その優美な幸福感と淡い哀愁が名称にいかにもふさわしい。

第1楽章　アレグロ　ヘ長調　四分の四拍子。ソナタ形式。

序奏はなく、いきなり第一主題がヴァイオリンに歌われるが、ベートーヴェンのヴァイオリンとピアノのためのソナタにおいて、この楽器で音楽を開始するのは「春」が初めてであり、それだけヴァイオリンが重視されている、と考えられよう。当時の習慣ではピアノのほうが主役だったからである。

十六分音符で下降するテーマには、すでに春の幸福感と、それに伴う、やるせない、たそがれのような情緒が感じられる。第二主題に向かうパッセージの半音下降にもその特徴があり、明るさのなかの淡い淋しさが第一楽章の魅力なのだ。

第2楽章　アダージョ・モルト・エスプレッシーヴォ　変ロ長調　四分の三拍子。自由な変奏形式。

優美な歌に満ちた緩徐楽章で、気分的には第1楽章をさらに延長させたものであり、若い、みずみずしいベートーヴェンの心が流れている。

テーマは一つしかなく、まずピアノが歌い、ヴァイオリンが伴奏する。次に主役と脇役が交代し、経過句をはさんで、まずピアノ、次にヴァイオリンが主題の形を変えて奏する。とくに後者が変ロ短調で歌うところは印象的だ。結尾部には第1楽章、第1主題の音型が何度もくりかえされ、二つの楽章の有機的な統一が図られている。

第3楽章　スケルツォ　アレグロ・モルト　ヘ長調　四分の三拍子。複三部形式。

リズミックで軽快なスケルツォであり、きわめて短く書かれている。

第4楽章　ロンド　アレグロ・マ・ノン・トロッポ　ヘ長調　二分の二拍子。ロンド形式。

ここでまた音楽は第2楽章の気分に引き戻される。のどかなヘ長調のテーマは絶えず沈みこんでわくような趣を持ち、4小節目に現れる変化和音がそれを象徴している。

明るい間奏動機も登場するが、第2主題はハ短調、第3主題はニ短調で、暗い方向へ傾斜しようとする。しかし主役はやはりロンド主題で、あるいはヴァイオリンの優美な対旋律を伴い、あるいは変奏によってリズムを変え、魅力とヴァラエティに富んだ進行を見せるのである。

レコーディング風景

録音にあたって

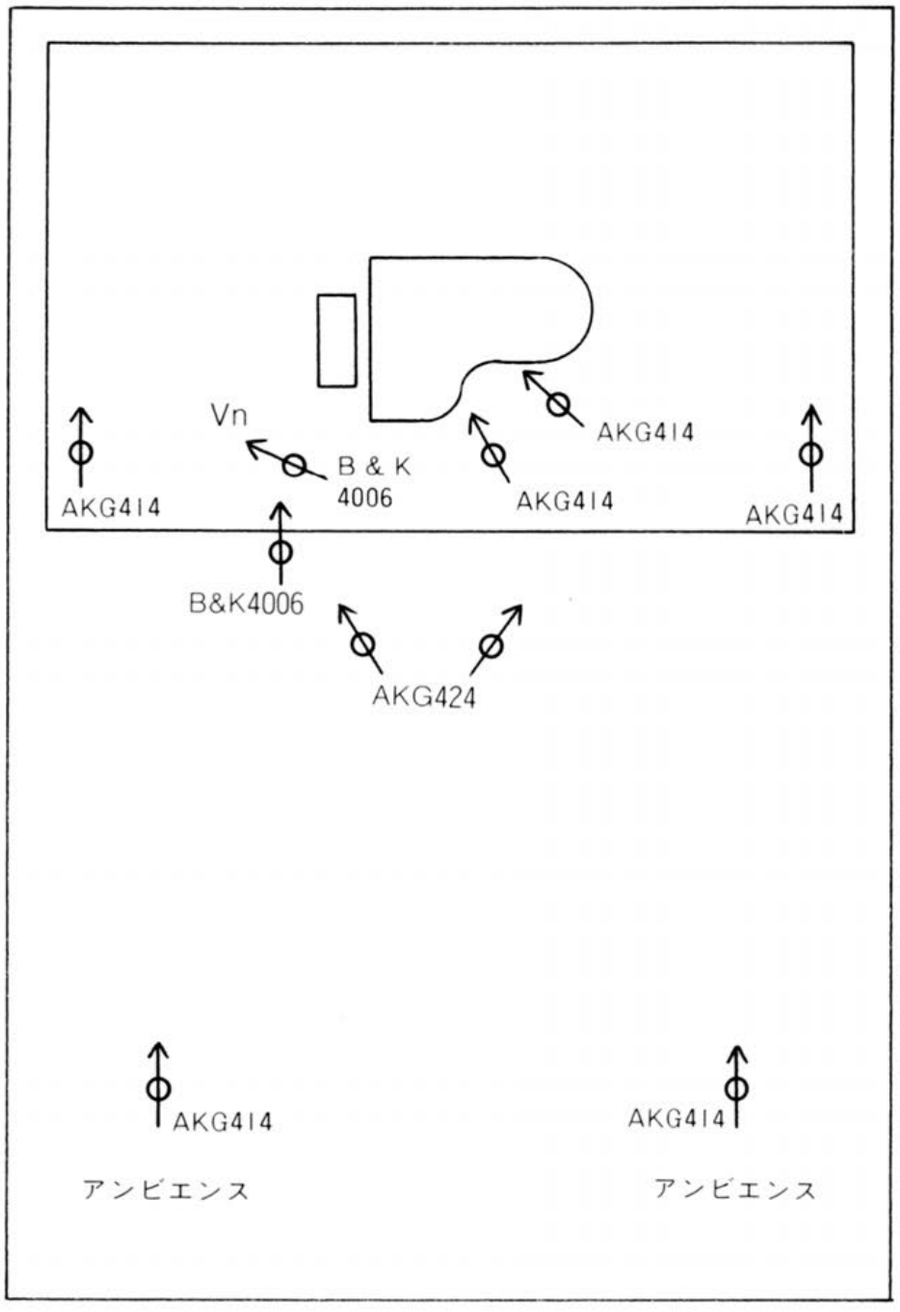
株式会社ファンハウス　録音エンジニア 蜂屋量夫

レコーディング企画より約2年、ようやく実現されたこの画期的な仕事は、1990年2月、6月の2回に分け、オーストリア、ザルツブルクにて行われた。演奏はアバト率いるヨーロッパ室内管のコンサートマスターをつとめる、ジェラール・コルステン（Vn）とモーツァルテウム音楽院の講師でもある前島園子（Pf）の二人、ベートーヴェン「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」全10曲を録音した。

ホールはモーツァルテウム・グロッサー・ザール(大ホール)、500人～600人程度収容出来るホールで、主に室内楽のコンサートが行われる中規模のホールである。オーストリア放送(ORF)の常設コントロールルーム、中継用ブースなどがあり、しばしば録音にも用いられている。機材は常設コントロールルーム以外にもORFのものを数多く使える事が出来た。

録音スタッフは我々とORFより私のアシストをしてくれるエンジニア；ルパート・ピヒラー氏の三人。数々の打合せを済ませ、録音前日、夕方よりセッティングに入る。まずORFの機材倉庫に行き必要な機材をピックアップ、ホールに戻りメインマイクのポジション探しである。この日、ジェラールと前島さん二人、ホールでリハーサルをしていたのでその音を聴きながらポジション探しに時間をかけ、最適と思われる位置にホール客席ステージよりの天井からそのポイントにピアノ線をおろしマイクを取り付け、その前後左右を釣り糸で引っぱり固定をした。そしてピアノとヴァイオリンの近接用マイク、ルームアンビエンス用マイクをセットした。しばらくホール客席で二人の演奏を聴いていると、音がふくよかに湧き出てくるようで、日本でこのような音は聴いた事がない。残響が長く澄んだ音で素晴らしい。

そしてORF常設のコントロールルームに行き、



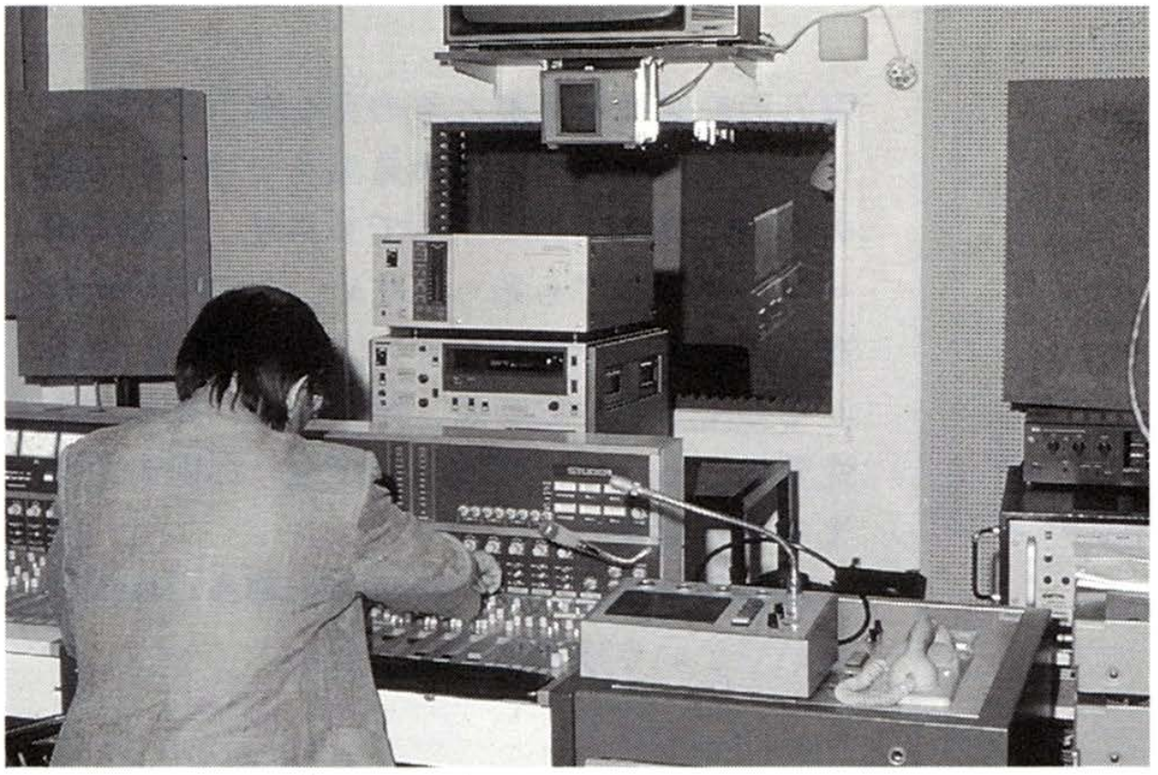
◀マイク・セッティング▲

バランスを取り始めた。リハーサルの録音を重ねながら、アーチストとコミュニケーションを取りながら最終バランスが取れたのは3～4時間後であった。

日本を出発する前、私とプロデューサーで海外の録音風景写真とその音を聴きながらマイクポジションの大体の見当をつけていったのだが、初めてのホールでもあり、最初のヨーロッパ録音でもあったため、その実際とはだいぶちがったポジションになってしまった。

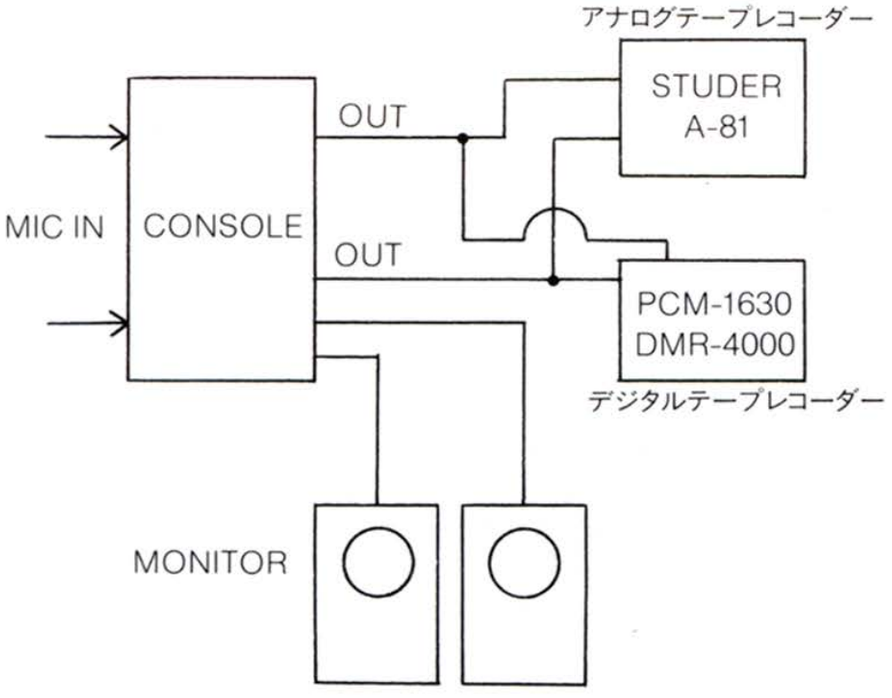
そして本番をむかえ、ボジションの多少の変更はあったが、順調に予定通りの録音を終える事が出来た。

気候風土のちがい、ホールの響きのちがいをいやというほどあじわった。



デジタル・テープレコーダ

モニター・スピーカー



録音ダイヤグラム

Recording Data

Console : STUDER 085
Speaker & AMP : HEA RL-403
Digital Master Recorder : SONY DMR-4000
Digital Audio Processor : SONY PCM-1630
Mic : AKG C-426
AKG C-414
B&K 4006
Digital Delay : EMT-445
Location : Grosser Saal, Mozarteum, Salzburg
Dates : February 9～13
June 9～14, 1990

Recording Staff

Producer : Nobuhisa Murayama
Engineer : Ryoji Hachiya
Assistant Engineer : Rupert Pichler (O.R.F.)
Mastering Enginnr : Setsu Hisai

Special Thanks to Dr. Heinz Kuschee (Internationale Stiftung Mozarteum) and Dr. Karl Matuschka (O.R.F.-Österreichischer Rundfunk Landesstudio Salzburg)

Instruments

Violin : Carlo Tonori-Venezia 1727
Piano : Steinway

Photography : Klaus Hennch
Inner Photography : Nobuhisa Murayama
Art Work : Hajime Fujii

制作協力；株式会社サンデュエット
企画・制作；第一家庭電器株式会社 DAM PC
製造；株式会社ファンハウス

DOCD-0025
(FXD-7018)